

憲教類典

三ノ四下
火事

ヲ保3
2770
32



憲教類典

三ノ四十 下
火事

門ノ保 3
番 2.770
巻 32

享保七年十二月十日



上野増上り大分物有るに
之曲痛しき事有るに
定火消す候事

但是是上野増上り有るに
其後誠心奉りて
消す事有るに
御城へ
申上り候事

一 滿原少原日又少之原方在居安
元是初時之名定中諸人少之
了是之半

但少之原方在安元是初時之名
御做了少稔福之時分之名
定中諸人少之
是之原方在安元是初時之名
發連義少曲掃之內發之名
了之元是初時之名定中諸人少之

少之原方在安元是初時之名
了之元是初時之名

享保九甲辰年三月七日

石川也江守殿少原

以是

尚蕃信蕃之少江也年存一自分
宅少了之原存御之名 御做了之名
是之原方在安元是初時之名
了之元是初時之名

人致所是、所及、所及、所及
上、所及、人致、所及、所及、所及
百、所及、所及、所及、所及、所及
右、所及、所及、所及、所及、所及

正月

享保九甲辰年二月十日

一、所及、所及、所及、所及、所及、所及
右、所及、所及、所及、所及、所及

一、所及、所及、所及、所及、所及、所及
右、所及、所及、所及、所及、所及
大、所及、所及、所及、所及、所及
万、所及、所及、所及、所及、所及
右、所及、所及、所及、所及、所及
出、所及、所及、所及、所及、所及

一、所及、所及、所及、所及、所及、所及

一 面々去る其川端人教
了る指出の事

一 堅立川分少名本川とて内在安
し面々其川端人教
新指の事

一 深川と居安なる面々少名本
川分南へ海を限り川と
人教と新指の事

一 存し魚防たる人教来新指の
事
いふに成り一と和深川へ
面々居安月と物と家
居安川と居安の事

一 本所深川居安と居安抱居安
有るに今人の来と内と人教
如く充て居安
為用意人教と居安
の事

一 本所深川分し出たる事

右之録番所小川所濱河是也
以長之向之申廣之有此不有之哉
右之流一象來也思一以快之哉
後之以思向之申廣之有此不有之哉

享保十三戊申年十二月朔日

以先

右之先也一為之思也其思也

思之思也斗思也一思也
象來二三人先一思也
亦思也思也思也思也
以思也思也思也思也
思也思也思也思也
思也思也思也思也
思也思也思也思也
思也思也思也思也

右之録番所小川所濱河是也
以長之向之申廣之有此不有之哉

享子保子庚戌年正月八日

出火之三日迄所出付人数之候
山曲内之屋敷山曲内
人数出付浦候之旨
山曲内之人数之候
山曲内之人数之候

十二月

享子保子庚戌年正月十九日

十二月十日
出火之三日迄所出付人数之候
山曲内之屋敷山曲内
人数出付浦候之旨
山曲内之人数之候
山曲内之人数之候

了此場所ハ尾段ニ至ル上ニ留地ニ
有之者有之

右ノ紙片有記有之面ニ去ル他
有記、之紙片達有之

戊正月

享保十六年 亥年 五月七日

一 所々多向也其向の所在也
之向也其向也其向也其向也

之向也其向也其向也其向也
之向也其向也其向也其向也
之向也其向也其向也其向也
之向也其向也其向也其向也

有之者有之

五月

享保十六年 亥年 十一月

之向也其向也其向也其向也

町中におわく自々多何やま
るくそと久あまを之を
しとくおとせ清留 戸
泉内言清の中ト存也新
そとせゆ及延行焼之は又
泉内と何うあり 所は多く清
後数日を経ち知事はたそふを
以多なる心で戸付事

但増大ししゆとの川白濁

捕て在出り如志記補くとの
ゆり不燃成も在運ては前
又出火命し候小刀下白々
屋あり及の捨新焼失
て出出の流とて魚家と人組
大勢力能わし及ゆ事

右の魚お極上と云ふ魚
も也流とそや字よとの也

亥十一月

右之町所一經者誤入之也

享保十七^壬子辛二月十八日

葉相達以魚以釣之魚也
後其控製之其捕之後魚之捕之
柳之在幸之方老中一海之船之
意之

子二月

右之趣向之方老中一海之船之

同日之辰之在幸之

享保十九 甲寅 年正月廿七日

抄年及近侍監殿以後

出也一別 御城中一人數入公
下年之階人如金之向一人數何
方之入者中魚之船之在幸之在
是之官以同自之使者之肉之人
越人教入之也其月之辰之

其子以少人少之居有之附之既之
後能如子以之其子以之其子以之

享保十九甲亥年九月十七日

海中少殿以後

定大借

四同好

少使番

一以之取居在安道出者之其子以之其子以之

之乃之其子以之其子以之其子以之

大借本番在城以若之其子以之其子以之

少曲捕之內及屋本如之其子以之其子以之

之內防之其子以之其子以之其子以之

其家性以之其子以之其子以之其子以之

其城下中

一右在安道之其城以後以之其子以之

其子以之其子以之其子以之其子以之

田川其下中

予中山山尾谷内より防備仕立次第に
曲插内危下中斗し時ハニニ終
清防より水より石焼立り次第に
予迷沖台ハニ河ハ川兵中交

一 右 尾谷防山部以法若山屯
ハ尾谷中移り中交手ハ河ハ
海及大川ハ根より陸より河ハ
見し河ハ川兵中交
右山尾谷ハ尾谷ハ以後休ハ河ハ

予の予ハ尾谷中ニハ河ハ
中交河ハ川兵中交

一 右 尾谷中ハ尾谷中ハ河ハ
何見しハ尾谷中ハ河ハ
中交河ハ中交

右ハ尾谷中ハ尾谷中ハ河ハ

九月

山中僧役

右山中僧役尾谷中ハ河ハ

少子之書

右之註係出之少書其右之註係
右之註係出之少書其右之註係

享保二十二年書之

出之註係出之少書其右之註係

是

一 平日出之註係出之少書其右之註係

出之註係出之少書其右之註係

押込

一 大出之註係出之少書其右之註係

二十日 手紙

大元

向安法春全檢系一三料

大元 地

二十日

押込

大元

三料

以上三丁

所

所

是之拾少人... 大... 料

料

一 御城... 出...

十日 手原 力...

二十日 手原 力...

二十日 押込 日...

二十日 押込 力...

十日 押込 力...

所安... 料...

但... 者...

重... 斗...

手原...

右... 上

卯八月

右... 社... 所...

多行... 志... 地... 文

右... 書... 上... 除... 下...

元文元 丙辰年 三月 每日
一... 元... 後... 仕... 也...

意入... 中...

一... 定... 出... 書... 防... 出... 向... 浦... 城... 中... 曲... 痛... 向... 也... 大... 亦... 後... 去... 格... 別... 無... 以... 的... 有... 針... 心... 能... 不... 下... 能... 以... 若... 在... 是... 高... 在... 能... 必... 以... 行... 途... 中... 上... 在... 海... 行... 以... 快...

了無餘心所了等場心所出車後
有之類、下有少心

有之類、下有少心

元文五年申年十一月八日

四日付
以便著

之類、下有少心

一 御言 御靈心下定心所一組元在
法中心管心以助無心心
後其心自付以便著下後心所
人教心主下中矣

一 御靈心下定心所一組元在
少心報心月心心以軒心下
心下心心附心粉心下
心供心下内庭并檮縁心
心心心心心心心心心心

是の如く有りて目下如く有り
家の人仕事行ふ事有る人
殿 申すに成りて是に成り

一 大急の事申す極別用意に人取配

主事の子に 申すに成りて是に成り

清一組の人取と以て成りては
の事申す程に申すに成りては
申すに成りては

一 以て供成りては 申すに成りては 承仕者

僧の掃除に之の事申すに成りては
成りては 申すに成りては
申すに成りては

存し海に仕事行ふ事有る人
申すに成りては

十二月

寛保元年 辛酉年 十二月廿九日

中務大輔殿
隠岐守殿

以後

申奉し、其旨を以て、
多分出の旨に、
所申の旨、勿論消防に、
有、其旨を以て、

一、其旨を以て、
申す、其旨を以て、
申す、其旨を以て、
申す、其旨を以て、

切、其旨を以て、

其旨を以て、

右、其旨を以て、

達、其旨を以て、

丙、其旨を以て、

寛保元、其旨を以て、

丙、其旨を以て、

中務大輔殿

以後

隠岐守殿

山目付

一 出火の打掃一名付の書留人致
石見の所抄居の所人足り
中目付の所人足り
石見の所人足り
石見の所人足り
石見の所人足り
石見の所人足り

一 或士方延付人足り
石見の所人足り
石見の所人足り
石見の所人足り
石見の所人足り
石見の所人足り
石見の所人足り

石見の所人足り
石見の所人足り
石見の所人足り
石見の所人足り
石見の所人足り
石見の所人足り
石見の所人足り

寛元保二壬戌年四月十九日

御同付
御使番

出火の打掃

全森立記中補代

仙石誠前守

三化元浮代

南院修理室

大手組

横田組

京都御所

秋月佐治

右之丞

佐治氏勤方之次

奉旨下御中合口

四月十九日

寛保二壬戌年五月十五日

以同付

以便番

出火之節坊

大御所

丹波守兼左

右之丞 佐治氏勤方之次

奉旨下御中合口

五月十六日

寛保二壬戌年十月六日

以同付

以便番

出札の旨に坊

何系惣三平代

清江出雲守

仙石頼朝守代

伊達大膳守

大子組

福永万代守

横田組

柳原持守

右之邊に依付の勤方之儀承奉
に之旨申合ふ

寛保二戌年十二月廿八日

御目付に

一 出札の旨に坊
是の旨に抄取の所人足は
多助の旨に申場、系人足は
下中、出車場迄く、是れ集
是れ、まゝ申合申

武士方強所人較之唯今之旨
向方以之旨、系人足は、

右之魚也半見也

寬保三合 壬午閏四月十六日

伊豆之殿 以後

伊豫之殿

大車裝束高令發石仕禮前
後 佐出所
組并也來 寫 近 移 又 結 續 正

換下中半

近來江中之志也 誠明也 孫身
目立也 換 柳 辰 有 也 右 柳 一 依
句 後 一 有 也 月 半

以上

至四月

右之魚也 所謂也 半場見也
也 一 有 也 右 柳 一 依

延享二乙丑年

大目付

出火之旨は所敷也所敷之旨は人数
手及出の半少塔所之旨は所敷也
以少偏所之旨は所敷也所敷之旨は
塔内人数及所敷之旨は所敷也
人数及所敷之旨は所敷也所敷之旨は
所敷之旨は所敷也所敷之旨は所敷也
所敷之旨は所敷也所敷之旨は所敷也
所敷之旨は所敷也所敷之旨は所敷也

所敷之旨は所敷也

延享二丑年

延享二乙丑年二月廿日

稚業以殿

以殿

佐渡以殿

大目付

以目付

所敷之旨は所敷也所敷之旨は所敷也

後花怪象との捕らぬは極意に
お尋ね老中へ御座り候へば

右の趣向にてお尋ね候へば
お尋ね候へば御座り候へば

丑二月

延享二年七月十二日

右趣向候
御座り候へば

大目付

御目付

出書候御座り候へば御座り候へば
御座り候へば御座り候へば
御座り候へば御座り候へば
御座り候へば御座り候へば
御座り候へば御座り候へば
御座り候へば御座り候へば

子連丁卯年

存一五五拾六年竟臨海人數六一
之何今之切々お申上申上申上申
以正定中清弄防方之古石上清
之取集公官の場也之海村人数様々
呼入甲申然らる一山場也之屋敷下人
般呼入之地也之今更也之之也
少使者より人数を連丁卯年

定享二乙丑年七月十二日

后進将監殿

湯浅守殿

以後

大目付

山目付

出立之時屋敷近之町和名村人数
及出立申上場也之之申上場也之
山場也之屋敷也之屋敷也之
山場也之人數也之申上場也之人
数也之申上場也之使者也之申上
場也之申上場也之申上場也之

右之類下等如違公在由凡少月有ハ者下
達ハ

延享三丙寅年三月六日

相摸ノ殿 以後

大目付
山目付

築地島下 浅草邊近所 殿 乾燒
少敷一少包掛ケ仕合儀ハ 侍下

御下儀 普請ハ先見合下儀

右之類 向々下等如違公

大御所様 大納言様 山目付一殿

達ハ

延享三丙寅年三月十四日

新米江殿 以後

紅葉山 御宮 御座 存差 御城

色所 出下下 子江 坂下 少下 和と酒井
及下 耐人 敷下 出下 方

冲城乃人合之四月日其人子速在
其家下多故之志山名因情与曲制
神前与檀田十印去后下之法也

三月十日

延享二丙寅年三月

出火一子后建具兵诸道具亦世還
之抄如直又二大八中二種人我亦
之月世還也其路之坊亦如人亦

歲亦福以無不屋五極有自乞足
自乃中右捕法道具亦二亦上息也
吟味之上有入二勿漏家之主女人組
之乃後下其然也

三月

延享四丁卯年四月十六日

其波子敏也後

今日大牛車三付乃何 御接續明

之の事

延享四年丁卯年十月廿三日

相模守殿少後

四月廿日

松平多助大補

松平大和守

酒井良直少尉

松平誠後守

大久保出羽守

若出守ありて防正

松平後守

ありて先年相達より先年より不

及之候事お達より先年より不

寛延元年戊辰年七月九日

加賀守殿少後

四月廿日

中半、付書上、之、外、自、之、八、月、番、
若、年、番、也、扱、以、旨、其、得、之、意、今、後、
月、番、之、若、年、番、也、書、付、亦、之、法、
出、之、以、上

七月

寛延二己巳年八月十六日

佐藤子殿、
御返、

日光、
中、書、四、條、後、有、御、旨、之、由、書、付、

小、石、御、旨、之、由、之、旨、也、出、之、一、
以、主、之、意、也、也、事、之、旨、也、上、御、旨、也、
御、旨、之、定、也、大、清、八、月、九、日、書、付、
防、之、旨、也、也、清、後、之、旨、也、
之、旨、也、也、之、旨、也、也、
之、旨、也、也、之、旨、也、也、

八月

寛延二己巳年九月三日

信濃了殿以後

山目行上

去月廿二日二條

山城少夫了是

上身右為向沖棧燈明白日的

海法山邊代流了中水序官法同

嫡子少養名番同嫡子為第一子緣

類法流番氏法物氏布衣以上以後

人 沖在凡西凡上登 城了作上

但為凡知少了會 日番表布

隱波了但了了定上保着上了是鐵上

右了魚了了了了觸

大御新樣 右納云樣山目行上了了

庫上

九月三日

寶曆二壬申年正月廿九日

依後了殿以後

山目月
四使番

中半場は人多く出る所は弱く
足は急ぎに瑞雨法事掛り
下中合はる物に召喚との見
信は江に依り人長を急ぐ
姓名お記す中

宝曆二壬申年正月晦日

板倉依後殿山後

近來大中半場は物に召喚との
列は多し上は出る物に
は向後急ぐ所は弱く
足は急ぐ所は弱く
お記す中
お記す中

正月

ゆゑの夫お約ん故途中に際
にお如ん今後人様く百と新
切の性来の親之人今下り
並言前にお弱の氣也此は様
し我お人へお望ん深先達り
觸の無様又下り付

右に通る相觸の防は無く一
下相觸の玉如丸の目付は
達ん

明和元甲 申年十月十五日

大同付

定大者人教へ後也来人数
におる之と段場中間に後
此力同く、新段及景大に
ゆゑの如く手明の者多於也

予建治五年以後おろそかに申す
右に無史諸侯に戸部一防古名
級場中間一級後存一級一級
急度中付以秋防大名に命
に下詔相違ふ

明和元甲申年十月五日

明和元甲申年三月九日

打年右近將監殿出渡

一 史に元ありしはあふる者ありし
内以親ししは斗組合に存ありし
中合家本二三人に家歴に存あり
右に名指おろし候に次第に申
し列る整ふ可きおとに申候
しにのりしに捕しに候に申候
右に無年にお弱しは是と候
しに捕所ありしにお海に候候に
以早き候候しに是掛しに候所

一 綢代笠端あり裏金

但酒喰り

一 丸小掛灯 白糸花の色笠筋

但紋柄の落し 白糸紋付

右 目巾の裏向 白糸お用ひ者お用ひ者
白糸お用ひ者お用ひ者お用ひ者
白糸お用ひ者お用ひ者お用ひ者

接侍の殿は 信濃の條に 出達し
以上
三月十日
松平維敏

右 欠達書 白糸 信出の書付
白糸お用ひ者お用ひ者お用ひ者
入所部中 白糸除下

明和又戊子年正月四日

差

一 此を所領のものに捕所を移すに
申

一 此を所領のものに所領を移すに
申すに御座り申す

右にありありと云々御座り申す
御子に接致すに御座り申す
御子に御座り申す

此の御座り申すに御座り申す

右に御座り申すに御座り申す
と所領のものに御座り申す
右に御座り申すに御座り申す

寛土月

申す

右に御座り申すに御座り申す
御子に御座り申すに御座り申す
御子に御座り申すに御座り申す
御子に御座り申すに御座り申す
御子に御座り申すに御座り申す

多林亦在仕中近右一類作中
穿以亦移又一新亦觸

十二月

右一魚之新亦觸

明和六己丑年三月十八日

和平右近將監殿 水濱

水野豊後守殿

大津之長也此言上之也元元

多出清坊之傳也如右大只之也
中司助方實保元中亦亦觸也
右一魚亦心坊中元元元元不
亦誠以之茂大津之抄子之也
知事、以右元元元元元元元
以結場前之元元元元元元元
是也之清防大名法場、亦法元
内中元元之指也元元元元元
以中後元元元元元元元元元

下好不用着所拍去のり能成る
名是又前條に魚下好お公の
有し魚下好お公の

三月

明和六己丑年三月十八日

色来大車場へ人物をす
との列の事く
お公の向後望下好お公の在

神にこの人信のり
目方の後番お及姓名承記中出
少段中後進の言定曆二申年相
觸の深右に魚お公の事

一 大車場へ
この方へは為久也万石公上と印
之の事新事へ向て
國の大車場混雜
之際、茂お公の

自身之成所和誠以名之也故言
費其色所出也之其親類土既
誠世活亦不誠以名之也故言
若以均其色則亦不誠以名之也
以福之而之也自今之集故言
之用之也其德以以後其集也
情手以中其也其德亦不誠以
其誠之也其德亦不誠以
右之也其德亦不誠以

三月

明和七庚寅年十二月廿九日

松平右京左大臣殿

水野玄波守殿

以後

大平一平江中元之也
其誠以名之也其德亦不誠以
中元之也其德亦不誠以

安永三 甲午年四月十八日

由同月
由便番

伊東伊豆守

井上主統

若出火一員ハ伊豆守久人数石
一連兵出主統兼ハ人数石出ハ指
名違ハ伊豆守ハ伊豆守ハ伊豆守

後ハ右ハ伊豆守違ハ伊豆守

安永五 申年正月廿三日

酒井石見守殿御海

由一先也一 是也 總合 伊豆守
合 伊豆守 伊豆守 伊豆守 伊豆守
前 伊豆守 伊豆守 伊豆守 伊豆守
伊豆守 伊豆守 伊豆守 伊豆守
伊豆守 伊豆守 伊豆守 伊豆守

正月

右通下江お觸

安永六丁酉年二月十四日

出幸し江清防し人殺し亦
用し人集りて其出清人殺
し毎りて是節亦し障に亦お
觸に下江お觸し人殺し亦
お觸

得共とていふ今も此にお
早是人平なり世治亦等用故
右軒に茂るるに何き茂
右幸場一はお觸に下江お
右傷所小口入口に少く見
斗割の積の掛に下江お觸
し右お觸に右得て右中
に右中へ入るるに右の
し右は是に下江お觸し

事、山内子進、其傷、不引退
之也、山内、之、事、也、

二月

右、山内、使、番、人、半、場、也、也、
右、達、山、内、之、事、也、

安永六丁酉年四月六日

水野、右、相、殿、也、

出、山、内、中、日、也、大、半、場、也、

山小姓、山小細戸

盡、細、代、滿、塗、也、

之、也、

夜、中、丸、小、排、打、赤、白、花、也、

筋、湯、也、

右、通、出、也、

場、之、也、

後、人、之、也、

之、也、

小若石の遠く御用い
交にお成り、水向、山名、右目
下、魚名、お石、石、立、中、半、場、
句、編、途、中、之、候、辰、石、石、石、
中、
右、之、類、之、相、觸、人、石、石、石、石、
了、石、石、達、
〃

二月

安永六丁酉年十二月三日

一、火、半、解、策、く、山、石、石、石、石、石、
石、石、石、石、石、石、石、石、石、石、
元、入、意、山、候、石、石、石、石、石、石、
石、石、石、石、石、石、石、石、石、石、

石、石、石、石、石、石、石、石、石、石、
石、石、石、石、石、石、石、石、石、石、
石、石、石、石、石、石、石、石、石、石、
石、石、石、石、石、石、石、石、石、石、

主

安永六丁酉年十一月十日

此の先ありて免ふる旨を奉
之由以認む。子以て町ノ惣合
之由認む。今も此年二三人
之由認む。亦意夜に所限あり
少額にて後、年中、別々
之由あり。之を控免す。之を前
捕に座に及所奉行に之を
其後、何れ捕は、之に不
右に、疑當否、其達、以、以、以、以、
之、以、以、以、以、以、以、以、以、
其、以、以、以、以、以、以、以、以、
其、以、以、以、以、以、以、以、以、
其、以、以、以、以、以、以、以、以、

十一月
右に通可なり。其の
安永六丁酉年十一月十六日

安永六丁酉年十一月十六日

あつたてゝいかに先言入申付は又
直に夜早に番おこしあつたは神代
下りし御いりたお流しなふた
枕に茂おつたは内御早に木
あお達いとも主人と葉の御所
斗取とあり幸い通達無し
の共無うし枕に御いりた
望沙法ありしに枕に去り
り浦車いり且又いりしに

内御意入交りしは御いりた
不及申付は入言を御いりた
望し御いりた

右に御先年茂お達し御いりた
甲に御いりた御いりた御いりた
相又入言を御いりた御いりた
りしに御いりた御いりた御いりた
御いりた御いりた御いりた御いりた
と御いりた御いりた御いりた御いりた

以秋下新海... 人集... 内... 附... 其... 秋...

二月

右... 春... 秋... 秋...

安永七戌戌年二月

伊...

四曲... 中... 之... 所...

之亦ハ法場ニ在リ右左ノ人
數所在ハ其宗以中清防カ
後ハ秋ヲ社カ得ル右ノ所是ト
ノ人數カ増ハカ右ノ所
カ行ハカ後ハ

二月

右ノ通相達ハ右カ得中達ハ
少便番カ半場カ右ノ所ハ後カ
カカ在カ

安永九庚子年六月十九日

遠江守殿御後

四目付

一向後御城番中御後高
日ノ直便直人カ在カ定カ
御城上迄ハ并カ曲橋内出カ
其子連ハ在カ燒カカ官廊下カ
詰カ果以中カ在カ勅事ハ後目付
少人目付選カカ七目付

夜に 沖城番に極を去
し 出火し 延焼火
し 廊下し 延焼し 延焼
方 延焼し 延焼し 延焼
し 延焼し 延焼し

但出火し 延焼し 延焼し
し 延焼し 延焼し 延焼し

中合 延焼し 延焼し 延焼し

延焼し 延焼し 延焼し

右に通り 延焼し 延焼し 延焼し

五月

右に通り 延焼し 延焼し 延焼し

延焼し 延焼し 延焼し

安永九 庚子 六月 三日

延焼し 延焼し 延焼し

沖城 延焼し 延焼し 延焼し

延焼し 延焼し 延焼し

夜在信後口役少人抄一良之同
役乃口柳、沖月社 信在沖流
目付の小人目付 志淋之乃の良是
沖城の口在也なり 山崎の山達
中へ向て、山達 志之新殿の以上

六月

村上三平師

丸毛 一子

山川中徳子

右之達書乃新 信初、山崎
名ハ在、山崎達書、新之立之
部中ハ徳入此部相除之也

天明元 辛丑年正月廿四日

酒井石見乃殿以後

頃日火半解束、山崎山達部
島右衛門組共力同心 江戸中 上直
夜お上り、少歳怪象未見信ハ

山ノ武士所發ホハ入ル所迄ハ
互捕山ノ中海ノ旨ヲモテ急令
ハテ長達至ル

正月

天明元年 丑年 十月九日

海後ヲ殿ハ後

頃日ハ中半解束ノノ付ハ先手建子
長右衛門但江戸中意取也了後

ハ海ハ長怪發去捕ノ方ホハ後
海半尚甚長右衛門ノ中海ハ
長リノ中海ノ旨ヲモテ急令
長ノ長達ハ先物凡山目付ハ殿ニ
有ル急令

十一月

天明二年 寅年 十二月廿八日

左田海後ヲ殿ハ後

諸口如精之稗子者火車
場何人及屋中 立於此
之口者年之 蘇古勿得參論
今之 稗子者 若理不盡
後者 稗子者 於場而
以之 混雜之 稗子者 亦
以之 稗子者 稗子者 亦
之 稗子者 稗子者 亦
家 稗子者 稗子者 亦

稗子者 稗子者 亦
有之 通 向之 稗子者 亦
以 稗子者 稗子者 亦

十二月

天明二壬寅年十二月

所 火 諸 稗子者 亦
定 火 諸 稗子者 亦
諸 稗子者 稗子者 亦

火の向く中 清きあふ火のあふ
松の下は後 肝要なる所
清口と申すは 色に拘り年論
ありしより 清口出精
松子と見え 知る事
其の類あり 年論あり
了れども 君理を以て後
了れども 能揚あり 年論あり
了れども 了れども 了れども
了れども 了れども 了れども

了れども 了れども 了れども
了れども 了れども 了れども
了れども 了れども 了れども
了れども 了れども 了れども

宣 十二月

天明三癸卯年三月

加納を以て殿

田中半解ありし時
田中半解ありし時
田中半解ありし時
田中半解ありし時

り少歳怪衆之の足清り武
士家衆未に入りの所迄の石
捕り秋の海にのる意令
其の所達は正に其の目付一
つあり是達は

三月

天明六丙午年二月廿九日

酒井石見了敏少後

此の江中半 解衆の身先手前田
中右衛門組江戸中 正夜お色
少歳怪衆之の足清り武士
少歳未に入りの所迄の石
捕り秋の海にのる意令
其の所達は

天明元辛丑年十一月十四日

酒井了敏少後

四月廿日

一 出く元あし為く 山方冬暮し
内凡惣く 長斗り 組合し 居
家、中合家来 二三人 以 居
敷し 外 意之 夜、 石限 取也
以 棟之 新 海、 菘中、 列、
警、 一、 新 取也 石 怪 安 之 何
見、 取、 捕、 屋、 以 及 所 取
以、 一、 新 取 海、 向 薄 捕 意、
一、 石、 取、 取、 一、 無、 年、 一、

お船のり舟は是と怪安とのそ
町を歩行、お船の海を歩くと
竟、怪安との足掛り、町を歩
お船の海を歩くと、お船の海を
通、一、石、取、取、一、無、年、一、
取、一、石、取、取、一、無、年、一、
一、石、取、取、一、無、年、一、
同心 石、取、取、一、無、年、一、

十日

石一連三社相觸の正和九山月付一辰
下有魚達の

天明六丙午年正月廿九日

酒井石見と殿山渡

世多に世上結し外驛の發の石
石見の所とて玉のそとに海に

し組合の中合意度立番口換お
と中へえ入意下り玉結束
しとのく茂の所主人
用事おはすに自ら上り前
松子しとのくお結々集り足
と水屋可お魚の着候發
お波のり組合く過番所
お五日月番し所奉行お
て中へ玉の所多行の法

正月

天明六丙午年二月十日

越中守殿 以後

西月付

一 山曲輪内出火... 法流中
合... 人数... 居... 法流中
自分... 人数... 居... 法流中
... 以後 仲城を迎 見物

... 出火... 人数... 居... 法流中
... 以後 仲城を迎 見物
... 人数... 居... 法流中
... 以後 仲城を迎 見物
... 人数... 居... 法流中
... 以後 仲城を迎 見物

... 人数... 居... 法流中
... 以後 仲城を迎 見物

身を命に依るは信の不及是
近し一層に於て信の居る處を
防の根に於て信を不依信の
去同席也 城一人
中守の根に於て中受

一節の 審之非に役あり あり
向し之 勅方ハ是也 一也
何論に 終之

右に通法流一節に大目付

右達以旨に於て是意に於て

二月

天明六丙午年三月十五日

安房對馬守殿以後

先達と世上殊に 澄愛に於て
信の居る所にて是意を以て
中合意に於て審の根に於て
之先入意に於て信の居る所

上物群も亦物し白之番口秋
に亦早ういふ友いし百若定り
い色お早う右早ういとも他
即い掛怪あまの右捕ま行
和い後方あ夫海軍先達ら
お觸い魚いおいのい正お所と
右捕い夫い少袋あつい候え平
生い迎い袋いり候い百若い白と
怪あまのい掛いい右捕い候末

い近者下中あい

右い魚い下中お觸い

三月

天明七丁未年十二月

差

右い魚い候い先達ら袋お觸
いの先等困いいのい少いあも
いんいいあい出中人あいい

諸君の如く申公お守り半の
自火と云ふく多分附火に
守り怪家との尺掛り
右捕り謝り候へ向備候
この先著所へ出申事
存り所色年所方今捕出
り候事一 早是自火著へ
諸君思ひまの女御候事一
このと候事見道候事

守り候事一 早是自火著へ
諸君思ひまの女御候事一
このと候事見道候事
右捕り謝り候へ向備候
この先著所へ出申事
存り所色年所方今捕出
り候事一 早是自火著へ
諸君思ひまの女御候事一
このと候事見道候事

家主有限裏店しとのる七人教
お増活長多あやまらぬと
とる子連歩消の親と後と右に
魚お成所入用茂出ると親系
こり存のの先 類焼はし
甚難事一車こい官成之け
入用不お掛換所 役人走
即系しし 下中い支し
右入用し後身實之難事

後居しし 下中い

但此頃等六つ大切無様月事
出る出入しとあの家主は座

天月... 以換と後い

親号しし 下後し 下借家主

下中い

右之紙送所奉行和紙治後
少官所中 入意しはお觸り以上

十二月

右之証 俗初 少之付 二ハ有也
見ハ男 水調 止 水除 七 凡ハ

天明八戌 申年二月廿日

多 居丹波 寺殿 山海

系 於 御所 白 兵 二 條 御城

御 在 丸 寺 外 寺 上 寺 付 明 六 日 起

不 仕 有 寺 山 男 寺 殿 寺 殿 寺 殿

寺 達 山

右之 禁裏 之 殿 一 退 入 付 殿 中

水 除 了 凡 山

天明八戌 申年二月七日

一 多 居 丹波 寺殿 山海

一 禁裏 寺 上 寺 付 有 付 御 様 殿 明

八日 熱 出 仕 事

一 病 氣 切 少 退 居 寺 向 寺 大 日 音

一 寺 中 一 抄 年 伊 是 寺 宅 一 使 人

乙亥歲事

一 在玉在色一而一應札一在故更

但在國在色一嫡子德在

在右口口

一 鳴物 台台 明後九日 乙亥

行止一舉

但善清言不苦

右一通一在相解

右一禁裏之款一認入此款中

除一

天明八戌申年二月十三日

多居右丹波之殿 以上書字

御口上

禁裏

海印機嫌克新如少產山

石野交社

思

御殿是上之付也御目録之趣以
進熟之此後宜之也

仙洞

御機嫌能成御座也
御殿
御殿是上之付也御目録之趣以進覽
此後宜之也

大女院

御機嫌能成御座也
御殿

御殿是上之付也御目録之趣以進覽
此後宜之也

女院

御機嫌能成御座也
御殿是上之付也御目録之趣以進覽
此後宜之也

林下裏也 御小神宇 黄金五指板 山鹿尾板

仙洞ハ 糸浪三百枚 沖七神抄拾ハ 四屏風抄五ハ

大女院ハ 糸浪百枚 編緬抄拾拾卷 少屏風一五ハ

女院ハ 糸浪百枚 編緬抄拾拾卷 少屏風一五ハ

女一宮ハ 編緬抄拾拾卷

長橋局 糸浪五拾枚

禁裏

惣女中ハ 糸浪五拾枚

仙洞

惣女中ハ 糸浪百枚

大女院

惣女中ハ 糸浪百枚

女院

惣女中ハ 糸浪百枚

右ハ 禁裏ハ 糸浪一拾枚 入ハ 糸浪中 糸浪中

除ハ 糸浪ハ

天明八戌申年二月廿日

鳥居丹波守殿御後

年婚 勅使 院使 春系

向延川 守新前 任 任 任 任

池乞人 殿 門 允 守 守 守 守

守 守 守

右四書付一未入

禁不重表是上守身 治出上書加

守身 守身 守身 守身 守身 守身

守身

天明八戊申年二月廿日

物野海後守殿御後

一 所交京師大史守檢校本後

守後御用守不賣買一切令行上

守守 守守 守守 守守 守守 守守

對守守京師入賣買守隊守勿

滿諸人 守守 守守 守守 守守 守守

高致官發有能之教示下校以若
世方相育在能行之上實買以
以能又ハ之利 至實何之記
之如買之也 不賣出者能如
之矣 下乃曲半ハた之伸之
同 之 右能後之之
有之 下中切之 下 下之 下
能員之之之
有之 能中能私順之仕能所方

有之不備視之 下能相解也

天明八戌申年二月廿日

牧野梅溪子殿

一 能度京師大卷之月若抄之卷
掛水茂能後之流之小能内英
近江丹波丹後播磨國山ノ
雜木松板板根能結子以能如
對之能京師之賣出之 下之

天明八年三月九日
一箇中
官私領ハ所至地既
早クお世ニシ價ニ高シ
与能ク教示セ給
分ハ世交お解ハ
之賣買後多家ハ
之分裁令教ト申
付是又日横取公
伐出賣拂ハ後去
手
申

右ノ類ハ裁内天
播磨國御料私領
少横横取給ハ

天明八年三月九日

一箇中
之の候入意ハ
身ノ面ニテ天
急用ハ所
候

お守の夜也少歳令一坐る
程又此多記の之類お達以候
候海

三月

右支新候海書御台候
少書付与らひ候一少の此
書裁との御下候候
入書

寛政二庚戌年二月七日

与居丹波子殿以後

當喜ハ明
入書
二月
二月
二月
二月

二月

寛政三年 亥年三月十三日

相平伊豆公殿 御後

出火之良辰凡古之厄災兵火社
所土中ノ中半場ノ也ノ中
お早ク防之候後其ノ人救
不之ノ所ニ至 向事ノ也
救ノお遣一人救ノも出マセム
寛政三年三月十三日

右ノ紙享保年中相觸ルノ年
久後候ノ所ノ遠クノ様様又
可ク之紙遠クノ事

十二月

寛政四年壬子年二月六日

戸田采女正殿 御後

大目付 仁

Handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page. The text is extremely faint and difficult to decipher, but appears to contain several lines of cursive script.

